

令和6年度 第16回仙台城跡調査・整備委員会 議事録

- I. 開催日時 令和7年1月23日(木) 10時00分～11時30分
- II. 開催場所 仙台市博物館 1階ギャラリー
- III. 出席委員氏名 藤澤敦委員(委員長)、安達幸信委員、稲葉雅子委員、大山幹成委員
籠橋俊光委員、風間基樹委員、渋谷セツコ委員、山中稔委員
- IV. オブザーバー 宮城県文化財課 大沼技師
- V. 事務局職員 (教育局文化財課) 長谷川課長
関根仙台城史跡調査室長
鈴木災害復旧担当係長
(青葉区公園課) 降幡課長
(青葉区道路課) 佐々木課長
(仙台市博物館) 樋口副館長
- VI. 会議の次第
1. 開会
(1) 課長挨拶
 2. 議事
(1) 仙台城跡整備事業について
・東丸土塁園路整備について (資料1)
(2) 災害復旧事業について
・災害復旧事業の進捗と今後の予定 (資料2)
・復旧工事の公開状況 (資料3)
 3. 閉会
- VII. 傍聴人 2名

※会議録の署名について委員長は風間委員を指名

1 開会 課長挨拶

2 議事

(1) 仙台城跡整備事業について

【資料1】に基づき事務局より東丸土塁園路整備についてについて説明

渋谷 委員：安全柵について安全的には優れていると思うが、第3案の擬木柵と第4案のアルミ柵の2種類の使い分けはできないだろうか？例えば、階段整備の比較で第2案の擬木階段が適当でないかという事務局の提案であるが、この階段で手すりが必要な箇所は擬木のものを使い、土塁上部の沼側に対しては安全性の高い第4案の柵を使う等、一つに限定せず使い分けると良いと思う。

事務局：詳細な検討は進んでいない状況。今回は現時点で決めなければならない大まかな検討事項について報告した。渋谷委員からのご意見は十分検討できる。今後詳細な設計を進める中で検討していきたい。

渋谷 委員：比較している段階ということで了解した。

委員長：今回は基本的な方向性を決め、頂いたご意見をもとに詳細な設計に入っていくという理解でよいのか？

事務局：今回は詳細な設計に至る前の大きな方向性を決めたい。頂いたご意見で方向性が決まれば、次のステップとしてより詳細な設計に入っていく予定である。

稲葉 委員：東側の土塁は南側の部分がスロープになるということか。

事務局：スロープと階段の両方を考えている。

稲葉 委員：階段の設置は3か所位の想定か？

事務局：設置数については詳細な検討をしていない。例えば南側については、土塁の高さが低い所もありスロープだけで行く可能性もある。少しでも段差があれば、階段の設置を検討する。

稲葉 委員：ベンチを設置して滞在時間を増やす予定は？

事務局：土塁上に登り、そこからの景色を楽しんだり、歩きながら散策したりする事を想定している。ベンチ等もあると、そこで休憩しゆっくり風景を楽しんで頂くこともできると思うが、園路の幅もあるため、ベンチが置けるかという検討も必要になる。現段階ではそこまでの検討に至っていない。

大山 委員：園路舗装の部分で、第1案と第3案が同じポイントで上がっているが、車いすの方は第3案の砂利系舗装を通るのには抵抗感があると思う。砂利系舗装でも行かれる方はいると思うが、バリアフリーの観点から少し疑問に感じた。

事務局：バリアフリーの観点からは、第1案の土系が動きやすいと思う。ただ第3案の場合でも車椅子が動けないわけではない。事務局としては、点数付けをしながら検証している中で、同じ点数ということで、どちらを採用するか決めかねている状況である。委員会の中で様々なご意見を頂きながら、どちらがより良いかを考えていきたいという趣旨もあり、この二案についてご報告した。第3案にすると、その後の耐久性・修繕の面では第1案に比べ優れていることもあり、どちらをより評価するか、検討が必要である。

安達委員：回遊性の観点で、北側の端部と南側の端部は既存の園路に繋げる計画はどう考えているか

事務局：既存の園路とつなげることは事務局でも検討している。階段の位置やスロープの位置が決まっていないため、それらが決まってきたらつなげる方向で考えていきたい。現在土塁への導線がない状況であり、既存の園路との接続は今後も検討しながら進めていきたい。

籠橋委員：東側の土塁について、近世期に土塁上部には何があったのか発掘調査で解明されているか整備後の景観の変化も含め、どのように考えているか確認したい。

事務局：発掘調査は土塁の東側と北側でそれぞれ実施している。東側は、上部を調査すると基本的に何も残っておらず盛土だけである。現在の調査成果からすると、東側については近世または明治以降に表面は削られている可能性があると考えている。北側土塁については、一部石列等が見つかった。そのため何らかの施設があった可能性はある。景観の変化については、今後検討が必要な部分である。柵等の設置はあるが、盛土自体は 40 cm とそれほど高く盛るわけではないため、大きな変化はないと考えている。

籠橋委員：絵図等で東側土塁の描写はどうなっていたか。絵図に描かれているものとの整合性をとる必要性はあるか。全く施設がなかったということであれば、安全性の観点から第4案は了解できる。

事務局：全ての絵図を検討したわけではないが、東側土塁については、あまり施設が描かれているものがない状況である。どこかの段階で何もない、もしくは簡易的なものしかなかったのではないかと認識している。再度確認していきたい。

籠橋委員：博物館は整備に関してどのような意見をおもちか？

博物館：土塁周辺ではこれまでも桜の季節に散策される方はいらっしゃった。整備されたことにより景色が良くなったため、お客様にとっては、より身近に博物館を堪能して頂ける方も増えていると感じる。

籠橋委員：整備自体は非常に望ましいという理解でよいか？

博物館：散策等、様々な楽しみ方をしていただけると良いと思う。

山中委員：史跡指定地内での整備の方針としては、かつて存在したであろうものを反映すべきだと思う。そのうえで議論が始まると思う。

事務局：東側の土塁については、どういった施設があったか調査でもわからず、絵図等でもあまり描かれていない部分であり、もとの姿がわかりにくい状況である。検討を重ねていく中で、現状では転落防止柵等は必要だという判断である。色や形は検討中であるが、より史跡にふさわしい物の選択が今後の課題である。

委員長：本来存在していた施設が判明している場合はそれを前提に議論が始まると思う。ここに施設が存在していたかは絵図や遺構では判明していない。最初に土塁を作った段階では施設があり、その後撤去された可能性もある。改めて絵図関係の確認が足りているか検討が必要。バリアフリーの必要性は理解した。東側土塁だけの整備という大きな基本方針は良いと思う。車椅子が登れるようにするには東側土塁の南側の低い所からだと思うが、溝があるため蓋を掛ける必要があると記載がある。この溝は巽門周辺の溝跡で、それ自身が歴史的なものである。目立たないよう木の蓋をするなど方法はあると思う。巽門を邪魔するような形のスロープは避ける必要があり工夫が必要。こ

の手の整備の場合かさ上げするのが一般的だと思うが、雰囲気や地形が変わってしまう。断面概要図を見ると、園路幅 1500 mmを確保するため、内側にかなり大きく張り出す可能性があるようにみえる。地表に残る形状が大きく変化すると史跡の本質的価値の意義で問題になりかねない。園路幅 1500 mmは絶対譲れないのか、盛土の量を抑える方向で検討していただきたい。

事務局：十分検討しながら設計を進めていく。

風間委員：土塁を掘削してはいけないという前提があるが、盛土をすると全体的な景観が変わる。どちらの重要度が高いか疑問に思った。むしろ景観の方を重要視した方がよいのではないだろうか。

委員長：基本は残っている盛土の保護が優先されてきた。ただそこを保護することに熱心なあまり、違和感が残る整備は実際にあると思う。どう工夫していくかが重要。

風間委員：断面図の青字で書かれた部分が、歴史的価値がある部分なのか、何かに基づいて価値があるとしているならば良いと思うが、100年以内に形状が変わっているのであれば、そこはこだわらなくてもいいと思う。

委員長：近世以降の直した土であれば、そこは大丈夫であると思う。実際、土塁の上面は割と浅いところにある。次回の委員会の際により煮詰めた計画をお願いしたい。

事務局：設計自体は来年度も続き、整備自体は再来年度の施行を目指している。適宜委員会を開催しながら報告、検討していきたい。

渋谷委員：貴重な遺構のため掘削しない方が良いと思うが、転落防止柵の基礎の形状を検証する等し、盛り土を少なくする方向で検討していただきたい。

（２）災害復旧事業について

【資料２】に基づき事務局より災害復旧事業の進捗と今後の予定について説明

山中委員：これまで災害復旧部会にて、石積みの工法等について検討してきたが、本日現場で見た工法は部会にて報告があっただろうか。現場視察の際に疑問に思った事が二つある。一つは、積み方で、細かい石を築石の回りを一周するように詰めている状況があったが、元々の石垣と様相が変わっている印象を受けた。災害復旧では前の状態に修復するのが基本である。もう一つは、ジオテキスタイルの設置方法について。ジオテキスタイルを改良土で挟む工法にすることも記憶にはない。災害復旧部会の構成員の立場からすると工事の進捗も含め、もう少し頻度を高めて報告頂ければと思っている。

事務局：ご指摘頂いた２点について、まずジオテキスタイルを改良土で挟む工法については、これまでの災害復旧部会の資料を確認したところ、6月11日に開催した部会資料に掲載していた。その際に説明が不足していたのかもしれない。また、現代工法の対策において大きい方針は、鉄筋挿入工をプラスしてそれとジオテキスタイルを接続するという部分で、こちらについては部会にて何度もご意見をいただき、工法についてご理解頂いていると思っている。接続方法については、構造計算上あらわれないが、ワイヤーの腐食を防止するという目的であった。ご説明が不足していた部分で反省している。

事務局：これまでの部会や委員会でお示ししていたかもしれないが、一方で各委員の皆様方へのコミュニケーションについては、足りていなかったと感じた。今後も工事は続き、それ以外の整備でも様々なご意見をいただきながら進めていく必要がある。頂いたご意見を踏まえ留意して進めていきたい。

山中委員：本丸北西石垣の修復工事は、控えの短い築石を使って積んでいき、さらに崩れたところと変形の少ないところをすり合わせて修復していく難しい工事だと思う。現場の状況で、様々な判断を必要とすることが多いと思う。そういった際には、文化財担当の方が判断し、その中でも構造的な大きな判断が必要なことがあれば、災害復旧部会にも報告いただければ非常によかったと思う。

事務局：今後も、そういった判断を求める場面があると思うのでよろしくお願ひしたい。

委員長：山中委員と同じ懸念を抱いた。ジオテキスタイルを入れて、鉄筋で盛土に定着させるという大きな方向性について逸脱しているわけではない。すべてを部会に報告していると仕事も進まないため現場で判断することがあるのは理解する。ジオテキスタイルの定着の方法は、直接具体的な議論の中には説明はなかったと思う。判断が難しい部分であると思うが、重要な史跡の復旧工事のため慎重に進めていただきたい。その上で、ジオテキスタイルを挟む部分が、山中委員や風間委員の方で大きな問題がなければその方向で進んでいくことになると思う。もう一つ、石と石の間に細かな石を詰めることについて、基本的に間詰石がないのが切り石積みの特徴であるため、それが層状に入ってくると、石垣の作り方の歴史的意義が大きく変わる危険がある。隙間が空きすぎてこのままでは危ないという場合は詰めざるをえないと思うが、そうでない場合は、本来の姿に近づけることを基準に現場でもご判断いただきたい。確かに本丸北西石垣の石材は整形具合が良くなく、普通に積むと隙間が目立って心配なのはわかる。層状に入る部分が多くなると、かなり印象も変わってしまう可能性があるため、そこは文化財の担当者も含め慎重に判断しながら進めてほしい。詰めないと強度的に危ないという場合はやらざるをえないと思う。

風間委員：ジオテキスタイルの定着方法については、部会の中では決まっておらず施工業者に預けていたと思う。一般的には、ただ敷いてそれをサンドイッチにするだけであるが、地山に定着させ、改良土に挟んで定着を強めるということなので、悪い方向の作用はないと思う。ただし、標準的な方法ではないため、それがいいか悪いかについては、技術的に今の時点では判断できない。感覚的に強化されていると思う。場所により一部施工方法が違うという話があったため、施工方法等しっかりと記録を残していただきたい。

事務局：ご報告ができなかったこと、申し訳なく思う。反省を踏まえ今後は慎重に進めて行きたい。積み石についても、受注者や石工と再度相談しながら進めていきたい。できる限り元の状態に修復したい気持ちはあるが、E面については何度も崩落しているということ、石の形状からせり持ちがきかない部分があることを踏まえ、詰め石を隙間なく実施しているという経緯である。再度石工と相談しながら、従来の形に修復できるようにしていきたい。

委員長：限られた時間の中で大変だと思うが、担当者は後に今回の石垣の復旧について聞かれた際に、自信持って答えられるようお願いしたい。工事完了は、年度末ではなく半年ほど工期延長することをご了解した。

【資料3】に基づき事務局より復旧工事の公開状況について説明

稲葉委員：この工事が終わるまでは公開したり見学会を開いたりすると思うが、工事完了後に、“こういう工事をした”という事を本丸のどこかで公開する予定はあるか？それともHPのみで公開していく予定か？

事務局：東日本大震災の復旧後に設置した説明板があるため、新たに増設するのではなく内容を更新する形で調整していきたい。

稲葉委員： 仙台城に來た際は、伊達政宗の話で終わりがちである。東日本大震災も福島県沖地震も一つの歴史になっていく部分だと思う。そういう知識が得られるところがあるとありがたい。

委員長： 説明板の場所はどこにあるのか？

事務局： 東日本大震災で修復した各所にある。

委員長： お客さんが一番来る本丸にそういった説明板はあるか？

事務局： 現在建っている見学通路の真ん中に本丸北西石垣復旧の説明板がある。

事務局： 今のご意見は観光客も含めて多く人が来る場所でも周知を図った方が良いのではないかと捉えた。本丸では仙台城見聞館という施設を運営しており、例えば展示の中に過去に被災した石垣の復旧工事について説明する等工夫していきたい。

委員長： 前向きにご検討頂ければと思う。クラウドファンディングの返礼ツアーに來られた市外 27 名の方々は、全国各地から來られたのか？

事務局： 名古屋から來られた方もいた。またもう一つの返礼品である、文化財課職員による講演会の方にも外国の方が來られたり、関西方面から來られたりしていた。伊達武将隊目当ての方もいらしかった。

委員長： 遠方の方もいらしかったという事で、非常にありがたいことである。広い範囲の人に支援していただく仕組みも今後考えて頂ければと思う。

委員長： 復旧事業で大変な中、公開も進めて頂き非常にありがたいと思う。

事務局： 最後に本日オブザーバーとしてご出席いただいております、宮城県文化財課の大沼技師より一言願います。

県文化財課： 土塁の整備と災害復旧のどちらでも争点となったのが、安全性と史跡の価値について、どうバランスをとっていくかということだと思う。仙台市の場合は文化庁と直接やりとりを行っているが、県も含め他の仙台城だけではない部分の整備でも様々な問題になってくるところだと思う。情報交換しつつ進めていきたい。公開状況の部分で、工事の状況を公開しているのは良い取り組みであり今後も進めて頂ければと思う。

事務局： 次回、第 17 回史跡仙台城跡調査整備委員会は、3 月の開催を予定している。よろしく願います。